

産業技術史研究における各国博物館の機能 に関する国際比較調査研究*

渡辺 正雄** 中川 徹*** 三宅 宏司****

1. はじめに

本報告は、アメリカの産業技術史関係博物館調査の成果である。調査にあたっては、国内での予備調査と、イギリス、フランス、ドイツをその調査対象とする各班との総合調整を行なうため、数回の打ち合わせをしたうえ、訪問対象の博物館にたいする調査項目の設定とそれにもとづいた国内での特定した博物館での予行演習的調査とその結果を再吟味して最終調査質問票（この質問票は、庄谷邦幸・種田明「産業技術史研究における各国博物館の機能に関する国際比較調査研究」、本誌第4巻1号、63～66頁の脚注(1)に記述されている。）を作製し、調査前に各館に郵送した。

われわれは当初、アメリカとカナダをその対象に考えていたが、日程の圧縮でアメリカのみとしたうえ、ヘンリー・フォード博物館（デトロイト）、近代美術館（ニューヨーク）、スミソニアン協会のアメリカ歴史博物館を主要調査対象とすることにした。車社会を代表するアメリカのその中の象徴的存在としてのヘンリー・フォード博物館、アメリカン・ライブそのものを示現しているアメリカ歴史博物館、以上の2館がどちらかといえばハードな展示物で圧倒しているのにたいして主としてデザインを中心としたソフトな展示において

は白眉の近代美術館を主要調査対象とした。以上3館のほか、デトロイト・サイエンス・センター、ニューヨークにあるクーパー・ヒューウィット博物館（スミソニアン協会に属す国立デザイン博物館）とイントレピッド海・空・宇宙博物館、アメリカ自然史博物館、ワシントンのスミソニアン協会に属す芸術産業館と航空宇宙博物館等も調査した。調査期間は1987年10月19日から同年11月8日までである。

以下において、主要調査対象の博物館を中心とし、調査し得た概要とその特徴点を述べることとする。

2. ヘンリー・フォード博物館

デトロイト市ディアボーン地区にあり、18～19世紀のアメリカの歴史に関係の深い数々の建物を各地から移築したグリーンフィールド・ヴィレッジを併設している。ヘンリー・フォードのコレクションを基にトーマス・エジソンの業績を残すエジソン館として1929年フォードによって設立された。中央入口は、時計台を設け、レンガと白い大理石を組み合わせたデザインでだれにも親しみやすい奮闘気である。工場の建物を利用した大展示場は、天窗のついた間仕切のない建物で、ラジエータを内装した柱が縦横に規則的に配列さ

* 1988年7月15日受理
** 国際キリスト教大学, *** 国立科学博物館, **** 大阪教育大学

れている。展示面積は 49,000m² (本館) あり、地上1階、8分野80項目の展示分野にわかれている。自動車コーナーでは、フォード社でつくられた170台のオールドカーが時代をおって展示されている。600トンを超える大陸横断鉄道の蒸気機関車をはじめとする蒸気機関(その時代に活躍した石油採掘機など)、農耕機械が所狭しと展示されている。アメリカの産業技術の変遷を豊富な実物で幅広く紹介しており、自動車の多くは運転可能な状態で保存されている。アメリカ第一号のラジオ、エジソンの白熱灯、フォードのT型車、ニューコメンの蒸気機関、マートゥウェインの使用した電信機など、歴史的に価値の高い展示物が多い。各ジャンル毎の展示物を見て廻ることにより、アメリカの文化史、技術史、生活史が見学者の心に残るように工夫されている。主な展示物としては、

- 陸上・航空運輸の陳列はアメリカ最高である(自動車、消防車、機関車、民間飛行機馬車など)
- 農耕機具としては、酪農用具、トラクター、脱穀機、収穫機
- 動力機械としては、150台の蒸気・内燃機関、発電機、木工金属加工機械、1700年代初期の蒸気エンジン、アメリカ最初の組立ロボット
- 通信関係としては、印刷機、電信電話器、事務機器、ラジオ、テレビ、その他の無線装置、大西洋の海底ケーブル敷設機械、イコノスコープとよばれたアメリカ最初のテレビ、ポータブル・タイプライター
- 照明関係としては、最初のランプから20世紀の主な照明
- 家庭用装備品、などがある。

この博物館の展示の一つの特徴は、ともすれば生産技術やその歴史的な発展ばかりを追う従来の展示とは異なる、技術が大衆の生活とどのように係わりあっているか、またそれがどのように生活に変化をもたらしたかとい



図一 展示模様替え中の自動車コーナー
(ヘンリー・フォード博物館)



図二 電気機展示コーナー、つめこみ過ぎには館員も反省
(ヘンリー・フォード博物館)



図三 蒸気機関車を復元中の工場
(ヘンリー・フォード博物館)

うユーザー側に立った生活史に近い展示が増えていることである。フォード博物館には、家庭技術 (Home Arts) の展示コーナーがあり、暖房器、1930年代の台所、洗濯機、乾燥機などの資料が展示されている。

収集展示物が自動車を主体とした大型のものが多いため、約 16,000m² の別棟倉庫も

るあが、不足気味である。また軌道外線と直結した館内レールも展示作業には欠かせないものである。

グリーンフィールド・ヴィレッジには、18世紀の入植者の家や当時の学校、教会、またはリンカーンの勤めていた裁判所、フォードの生家をはじめ、フォードの最初の工場などアメリカ各地から移築した数多くの記念建築物が約100棟保存されている。エジソンの実験工場やライト兄弟が飛行機を発明した時に営んでいた自転車店など当時の状態を再現した建物も多い。スチームを動力にした工場、ガラスや木工・陶器の工場では、博物館の職員(多くはヴォランティア)が当時の技法による実演を行っていたり、19世紀当時を再現した農場では、職員が当時の服装で働くとともに、実際に農家の家庭生活を再現する方法で運営されている。6月―8月には、グリーンフィールド・ヴィレッジ鉄道が1870年製の汽車を走らせ、1913年製の蒸気船スワニー号がスワニー池に浮かび、馬車も走っている。例えば、移築されたアメリカ開拓時代の農家の台所で博物館の職員が当時の衣装をまとして当時の料理を当時の調理器を使って作るといった実演を見せており、ここを訪れる人々に、生活史・風俗史といったものの理解を深める一種の比較文化論的な面白さを感じさせる展示方法ともいえる。映像を利用した展示の紹介はないが、オリエンテーション用の映像ホールが設けられ観客に便宜を図っている。

鍛冶屋職人が古い鍛冶作業場で実際に種々の金具を造っていたが、彼は8年前に先代の親方からこの仕事を受け継いだとのことである。このように職人が持っている伝統的な技術、言い換えれば無形の技術遺産を保存することも博物館の重要な要素であり、このように、演示を兼ねながらそのような技術を保存するのも一つの方法である。

収蔵品は、申し出や調査によって物の存在

を知り、キュレータの判断で収集委員会にはかられる。収集品の60%が寄贈品である。

以下、聴取内容を数点あげておく。

展示物は実物で、かつ大きく重量物が多いので、展示する際には様々な問題がある。野外展示物に対しては耐久性が要求されるし、金属製と木製についても注意が必要である。展示を入れかえる際に、天井走行クレーンやブロックチェーンが必要である。また収集品の保存に関しては、大型機械が多いのでいたみや変化に注意されなければならない。特に、温度・湿度の上下変化、日照・日光も一般的に注意されなければならない。木材以外のものは、一般的に乾燥している方がよい。金属にぬる塗料は、金属の地金の縮みがあるのではげおちるおそれが多い。電気製品はエナメルがおちるので、あまり移動させずにミネラルオイルラッカーも塗布しておくのがよい。

収集に関しては、何を収集するか的をしぼる必要があるが、一つのまとまったインダストリアルプラントを集めるのも一案である。さらにそれに対応する工作機械を残すことも一つの方策であると考えられる。動態展示に関しては、何の作業をしているのか具体的変化がよくわかることが第一義である。科学と同様技術もユニバーサルなものであることを示す必要がある。入館者に興味をもたせる動態展示であるが、すべてをうごかす必要はなくビデオを併用してもよいであろう。

展示のフィロソフィーに関しては、機関車・蒸気機関などいくつかは実現しており、自動車に関しては現在入れかえ中である。発電機などの電気機器については、余りに多数を並べるだけで現在のところ全く無秩序の状態である。徐々に整理し入れ替えていく予定である。すべての展示分野に関して、どのように使用され、社会的な意味まで示せるようにしたいと考えられている。

自動車の展示に関しては、現在作業中であ

り、アメリカン・ライフを示せるものとして、ドライビング、ガソリンスタンド、シアター等も取り入れ、'87年11月に完成の予定で、20年間はこの展示を続けるつもりである。車のもつ社会的影響に注目し、自動車産業技術の内的発展についてはとりあげない。特別展に関しては、常時開催し、教育的効果をねらいとしている。期間はだいたい6カ月ぐらいで展示に関しては館外からの借用品もある。逆に他に協力される場合もある。全予算は、600万円を予定しており、二人のキュレータを含む約50人のスタッフが従事している。

館の運営などに関しては、フォード自動車会社と現在は直接的な関係は存在しない。館長の決定にあたっては、現在の館長の場合、理事会で4人の候補を選出し、各キュレータが面接によって最終候補者が選ばれた。キュレータはその資質として歴史の理解と物に対する理解が必要である。特に歴史学やアメリカ文化、博物館学等についての学位をもったものでなければならないとは考えられていない。

博物館へ物が寄贈される場合、気をつけなければならないのは、博物館の自主性を保持しながら寄贈者特に会社の宣伝になるようなことは、極力さける必要がある。特にアメリカにおいては、税金との関係を念頭においておく必要がある。

博物館がシアターの要素をもち、展示をショーとして演出する必要性も追求されている。観覧者に来てもらうことが必要であり、帰られてしまっただけでは存在意識がないと考えられている。

スタッフの員数は、フルタイム277人(その内、キュレータ15人、教育関係20人)、パートタイマー350~750人(警備員を含む、夏期に多く、冬期に少なくなる)、ヴォランティア400人(登録者数)がいる。友の会々員は約15,000人である。

3. モダンアート美術館

(ニューヨーク近代美術館)

1929年創立、19世紀後半から20世紀にかけてのあらゆる分野の芸術品の展示がされている。収集品に関しては、1880年以後のものが主流である。

収集にあたっては、優秀なデザインのものが高品質されている。インダストリアルデザインに関しては、1930年代以後のものを収集している。写真やフィルムもほぼ同様である。

建築およびデザインに関する展示としては、日本の帝国ホテルを設計したF.L.ライトの建築模型をはじめ、種々の建築模型や設計デザイン図が展示され、さらに工業デザインでは、1946年イタリア製自動車クリスタリア202の実物展示や机、椅子、タイプライター、電気スタンドなどオフィス器具のデザインに関する実物展示がなされ、美術と技術との接点という新しい対象を展示に生かしている。

また、展示しておもしろいもの、興味ももてるものを収集する方針もたれている。展示にあたっては、館外からの借用品を展示することもあるが、館で製作したパネルなどもある。'88年には、ポスター展を行なう予定である。

資料の保存に関しては、特にネガフィルムの保存にあたっては低温保存の方法がとられている。他のもの(紙・木製品)に関しては、倉庫に保管し、特別な措置は行なっていない。

館の運営は、館長のもとに美術館、キュレータ、公共、財政の四業務部門がある。

キュレータの業務には、六つ(絵画、素描、印刷物、建築とデザイン、写真、フィルム)の研究部があり、それぞれの各部門に6~7人のキュレータ、アシスタントキュレータ、キュレトリアルアシスタントが所属しており、全館員は300人で構成されている。キュレー



図-4 すぐれたデザインの家庭用品展示コーナー
(モダンアート美術館)



図-5 エスカレータの真上に吊られている
ヘリコプター

タは、20世紀の芸術、歴史、美術史、建築を学んだものを主として採用されている。

外国や国内の学生が数十人来館してインターンとして実地に学んでいる。

展示は、常設特別展のほか、国内外への移動展も行なわれる。展示や収集に関する基準や判断において、キュレーターは指導的役割をはたしている。

館の財政は、年間約2,000万ドルで、その財源の内わけは入場料20%、会員20%、寄附15%、基金15%、売店及び食堂10%、奨励金10%、その他10%である。

新規の博物館建設にあたっては、次のようなことに配慮しておく必要が指摘された。博物館の費用、教育的配慮が重要であり、展示のプログラムについては事前の分析と将来性が目的に適切なものでなければならないこと

と。建物のデザインは建築開始以前に充分考えてから決定する必要があること、等である。

4. スミソニアン協会

スミソニアン協会は、芸術、科学、歴史の各分野での知識の増集と普及をはかる目的として設立された国立の機関である。

総数13におよぶ博物館、美術館及び動物園を擁する機関である。スミソニアン協会は、イギリスのジェイムズ・スミッソンの遺言により、アメリカに寄贈した私財を基本として、連邦議会の決定で1846年設立された。博物館、美術館及び動物園はニューヨーク市にあるクーバー・ヒュウィット博物館をのぞいて、ワシントンにあり、モール(連邦議会議事堂からワシントン記念塔の間にひろがる緑地帯)周辺に集中している。

○スミソニアンビル

キャッスルの愛称で親しまれている建物。1855年完成。ウッドロー・ウィルソン・センター、スミソニアン協会の事務局として利用されている。

○フリーア美術館

東洋美術のコレクションを誇る美術館

○アメリカ歴史博物館

電気の発達、医学の歴史、アメリカの海洋事業、重工業機械類、紙幣やメダルなど、印刷・報道の歴史、移民の時に旧大陸から持ってきた文化関係の資料など6,000万点以上にのぼるコレクションを有する。

○国立自然史博物館

○国立アメリカ美術館

18世紀から現在にいたるまでのアメリカにおける絵画彫刻及びグラフィックアートを中心とする2万6千点の美術作品をほこる。アメリカ歴史上偉大な人々(500名以上にもおよぶ)の肖像画や銀板写真時代のものから現在のものまで歴史的に貴重な数多くの写真を含む個人肖像ギャラリー。

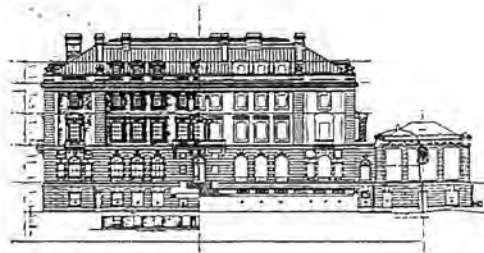


図-6 クーパー・ヒューウィット博物館 (旧アンドリュウ・カーネギー邸/国立デザイン博物館)



図-7 小学生による発明コーナー, 1986~87年中の優秀作 (アメリカ歴史博物館)



図-8 地下1階にある工房 (アメリカ歴史博物館)

○国立航空宇宙博物館

1903年ライト兄弟からアポロにいたるまでのアメリカにおける飛行史がわかるよう展示されている。

○ハーシュホーン美術館及び彫刻庭園

○芸術産業館

1881年にジェイムス・ガーフィールドが大統領に就任した時の舞踊会々場になった建物内につくられた。

○レンウィックギャラリー

○アフリカ芸術博物館

○国立動物園

○アナカステア町内博物館

○国立美術館

13世紀から現代までのヨーロッパ、アメリカのすぐれた絵画を収集・展示。

○クーパー・ヒューウィット博物館 (デザイン博物館)

ニューヨーク市の旧アンドリュウ・カーネギー邸にある。デザインの歴史的変遷と現

在デザインの研究と展示を専門とする博物館。

われわれは以上のスミソニアン協会の博物館のうち、デザイン博物館、アメリカ歴史博物館及び航空宇宙博物館を中心に訪問した。

1) クーパー・ヒューウィット博物館 (The Smithsonian Institution's National Museum of Design)

1897年慈善家として著名なピーター・クーパーの孫ヒューウィット姉妹によってクーパー・ユニオン校の附属施設として創立された。1968年スミソニアン研究機構の一部となり、修復された旧カーネギー邸に1976年移転され、現在に至る。300年にわたる世界の文化を代表する芸術的に価値のある装飾作品、デザイン、版画、家具、金属製品、ガラス製品、木工製品、ししゅう、染色、レース、壁かけ、壁紙などが展示されている。展示品は、デザイナー、学者、学生等に参考資料として役立つよう陳列されている。付属図書館

は、4万冊の書籍が集められており、200万点にのぼるさし絵作品が保管されている。人々が住んでいる状態で展示されているのが特色である。

2) アメリカ歴史博物館 (National Museum of American History)

1964年創立。1881年設立の芸術・技術館が基本となっている。1858年特許庁からスミソニアンに移された「工芸品と写真で風変わりな研究品」や1876年に開催されたアメリカ建国百年記念博覧会の陳列品を基に、44分野・16万件の展示分野を有する。建物延面積は3万7千平方メートル、他に収蔵作業場(サポートセンター)2万8千平方メートル、地下1階、地上3階の建物である。管理部門は3階になっている。目をみはるものとして30トンの大型エレベーターが2基あり、大型収集品の館内搬送に用いられている。トーマス・エジソンの電球、アメリカ歴代大統領の遺された品物、民族、芸術、機関車、アメリカの進歩・発展を示す数々のものが展示されている。例えば、電気の発達、医学の歴史、アメリカの海洋事業、重工業機械類、紙幣やメダル、印刷・報道の歴史、移民の時にヨーロッパから持ってきた文化関係の資料など。また特にアメリカならではの展示だが、ワシントンからロザリン・カーターまでの大統領夫人たちが着用したガウンがある。

館内では、19世紀風に復元された田舎の雑貨屋兼郵便局で切手を買ったり、トランス・ラックス劇場で古いニュース映画を見たり、昔ながらの丸太小屋の内装を点検したりできるようになっている。

3) 国立自然史博物館 (National Museum of Natural History)

6千万点以上にのぼるコレクションを有するこの博物館では、人間とそれをとりまく自然環境について学習できるようになっている。実際の生活環境の状態を標本は展示されており、見学者は「自然」により近い状態で

見学できるようにしてある。ネアンデルタール人たちの埋葬の再現によって、人間の起源とその進化が見学者に学習できるようになっている。アフリカ、アジア、太平洋地域、南北アメリカ大陸の伝統文化とその住民の日常生活の有様が紹介されている。

地下1階、地上4階の展示場及び地下の売店、レストランがある。学校からの見学者が多く、そのため学生用食堂、レセプションセンターも用意されている。図書室は主として研究者用に使用されている。

4) 国立航空宇宙博物館 (National Air and Space Museum)

1903年に初飛行したライト兄弟の飛行機からスピリット・オブ・セントルイス号、ジョン・グレンのフレンドシップ号やアポロの司令船等が展示されており、アメリカの航空宇宙技術の発展が見学者にわかりやすく展示されている。またスカイラブ宇宙実験室の内部展示や月から持ちかえった石に手をふれることもできる。

設立は1976年。施設は20万平方フィートあり、年間予算は7万ドルである。職員は、研究者が20名(内、パートタイム5名)、専門技術者3~5名、事務職員45名(内、パートタイム5名)、技術職員50名(内、パートタイム10名)監視員70名である。収蔵資料は3万件あり70%が宇宙、30%が航空に関するものである。受贈件数のうち、宇宙に関するものの70%はNASA、空軍、海軍からのものである。借用資料はほとんどなく、資料交換の相手先はソビエト連邦である。資料の貸出は、3~5年で博物館、宇宙センター、教育機関に限って行なわれる。研究職員はほとんどが航空技術訓練を受けたか、アメリカ、世界、科学、技術の歴史、または地学を学んだ者であり、博士10人、修士15人で、補助研究員はいない。現在、ジョンズ・ホプキンス大学との共同研究が行なわれている。研究費の補助は、スミソニアン協会、個人基金、NASA から出て

いる。教育事業としては、成人対象と子どもむけの事業が行なわれ、小・中学校のカリキュラムに博物館の展示内容を組み入れる試みがなされている。

企業とは資料の受け入れ、特別展、特別な研究などのほか、財政援助、資料提供、情報提供などの面において関係をもっている。

5. さいごに

アメリカでは、知識はすべて公のものという考え方が徹底しており、近代科学技術の成果に関してはことさらその感が強い。従ってそれらは図書館とか博物館等の公共の費用で保管・研究も含めて公共に役立てるようになるというところに行なわれてきた。文書資料及び「もの」についての私的所有観念は、それを博物館に寄贈あるいは寄托することでより有効活用をはかるといった一般的な傾向によって薄められている。

また、それ以外に資金援助（友の会制度による）や労力提供（ヴォランティアによる労働力、館内説明員として）というかたちで社会的参加が自発的に行なわれている。アメリカの博物館におけるヴォランティアの活動は活発で、古い貨車の修復作業（フォード博物館）や展示解説（ニューヨーク自然史博物館、アメリカ歴史博物館）などにかつて現場で働いていた技術者や普通の会社員あるいは主婦などが参加している。このようなことはアメリカの博物館ではヴォランティアの支援体制が良く整っているから可能なことであり、財源不足やそれに伴う職員不足のため活動が沈滞しがちな日本の博物館にはこのようなヴォランティア制度の導入が必要であり、そのためにもアメリカのヴォランティア制度は参考になると思われる。どの館でも喜々として復元作業、展示、案内などに励んでいる彼等を見ていると、われわれに社会におけるヴォランティアというもののもつ存在意義の大きさとその歴史性の相異に思いいたらされる。もちろん個人の猷

身的な奉仕活動に支えられているのであるが、それは立場を替えて入館者である我々にそのことが彼等ほどにつとまるかということが単に個人の決意を越えて存在しているように思われるのである。

各館とも展示コンセプトには十分な配慮、とりわけ入館者本位に見て楽しめ、あきないようにされており、常に次の模様替えの準備をおこたっていない。そのため館の研究員（多くはキュレータ）は、国内外の関連分野に目を配り、調査研究に余念がない。またさまざまな展示を通して、あってはならない社会的差別を解消する一助ともしていることは大変有意義な取り組みといえる。

展示にフィロソフィーの必要なことは、今回の調査に協力してくださったすべての人から聞いたが、次の二例はそのフィロソフィーに歴史性と社会性が見事に反映された企画展として我々のもとよりすべての入館者に強い感銘を与えずにはおかないものであった。

ひとつはアメリカ歴史博物館における第2次世界大戦中の日系米人収容所問題である。我々が訪れる少し前、米国議会下院を収容された日系米人に対する国家としての謝罪と慰謝料支払いについての法案が通過（'88年上院通過、大統領署名）したことは聞いていたが、このことに関する展示を博物館で見られるとは思ってもいなかったことである。

もう一つの例は、航空宇宙博物館における黒人パイロットに関する展示である。アメリカにおける黒人問題は我々にとってたやすく理解できることではないが社会のあらゆる分野に貫徹している（展示ではかつてそうであったという論調であるが）問題であることを示している。

これらのコーナーには、特にめずらしい貴重なものを展示しているわけではない。当時のフィルムや写真、新聞記事、現在のインタビューが中心になっている。しかし、だれもが胸にひっかかっている問題を真正面から取

り組んでいるのには頭が下がる思いである。これらの展示の企画、実施にあたっては、議会、関係議員、当事者と博物館とが完全にリンクして実現できたことを聞き、アメリカという国のふところの深さといったものを再認識させられた。

先の日系米人コーナーのテーマ“A MORE PERFECT UNION”はあくまで印象的である。問題をわれわれ自身に引きもどしたとするなら、現在および将来にわたり、博物館のもつ意味は常に新しく問い直し続けねばならないことである。アメリカと状況は異なっても、根源がかかえる問題としては同義だからである。かつて、日本の博物館でこのような問題を取り上げるとするなら、フィロソフィーの必要性を口でいうのはたやすいが、どのような歴史観や社会観を反映し得るであろうか。問題はアメリカにではなく、われわれにあるのである。

産業技術史が独立した研究領域として地位を獲得している欧米先進諸国においては、産業技術とともに知的生産物であるという共通の社会的認識を前提として産業記念物の保存や技術史博物館の運営がなされていることが明らかになった。

また、この種の研究には不可欠な基礎資料の保存や廃棄、もしくは秘匿が私企業の意志で決定されやすいわが国の事情と基本的な相違点がある。逆にアメリカにおいて博物館は、資料がもつ社会的な役割りの重要性を企業や一般大衆に周知させる役割も果しているのである。

スミソニアン協会における文献図書室の充実は目を見張るものがあるが、同時に資料の工作工房施設の充実は、単に資料の保存と展示のための補助施設ではなく、再現実験を通じて技術の本質を研究する実験室としての機能を有するものである。

産業記念物の保存にあたっては、機械、道具、設備など実物資料のもつ価値がそれらの

写真、文献等より数段優れることはいうまでもないが、それらをそれぞれの単体で残すのではなく、一連のシステムとして保存、展示する努力が必要であることが調査例から明らかとなった。

スミソニアン協会博物館群横の国立文書館の入口左右にある彫像の台座に、次のような言葉が刻まれている。

WHAT IS PAST IS PROLOGUE STUDY THE PAST

この二つの言葉は、日本と欧米の知識についての基本的な考え方の違いを表しているように思える。欧米ではこの言葉が示すように、過去を学ぶことがまず基本であるという考えなのである。

われわれが主要調査対象館とした3館は、アメリカの博物館や科学館が最近、現代的・近未来的科学センターと歴史博物館へとはっきり2極分解してゆく傾向にあって、産業技術史の研究部門を明確に打ち出しているきわだった館であり、われわれの調査目的に適合していた。

今回の調査の結果、アメリカに限らず調査したどの国にもその国を代表する産業技術史関係の博物館が存在しており、それぞれ素晴らしい展示で多くの入館者(アメリカ歴史博物館、航空宇宙博物館ともに年間約500万人)を引き寄せている。しかし、このような博物館のいずれもが、それぞれの歴史性、社会性を自館の存立基盤から展示にいたるすべて局面において反映しており、そのままを他国に持ち込めるものではない。われわれにとっては他のものを参考としながらも、独自の産業技術史研究の方法論にたった構想が望まれるのである。

今回の調査にあたって、訪問した各館で多くの人達のお世話になったが、ヘンリー・フォード博物館の John Bowditch、近代美術館の Stuart Wrede, James Snyder、アメリカ歴史博物館の Bernard Finn, Steven Lubar、航空宇

宙博物館の David Devorkin の諸氏には特に好意をもって長時間、我々の調査、聴取り等に協力して下さいましたことに対し、深く感謝の意を表する次第である。

なお、本調査の一部は昭和62年時文部省科学研究費補助金（海外学術研究、代表：中岡哲郎、課題番号：62041135）に負っている。